



平成22年度 発掘調査成果速報

平成22年7月24日(土) 見学会資料

小田原市

いしばしいしちょうぼぐん たまがわしぐん 石橋石丁場群 玉川支群

—江戸城石垣のふるさと—

はじめに

石橋石丁場群玉川支群は神奈川県小田原市にあり、市域の中でも南側に位置しています。

地形的には箱根外輪山の東端部で、その山塊は幾筋もの小さな沢によって開析され、複雑な山谷地形をしています。本遺跡は、それらの沢のうち玉川によって形成された谷の南側斜面に立地しています。標高は、200 m前後を測ります。

発掘調査は、神奈川県西湘地域県政総合センターによって進められている広域農道整備事業（小田原湯河原線）に伴うもので、道路計画範囲に所在する埋蔵文化財の記録



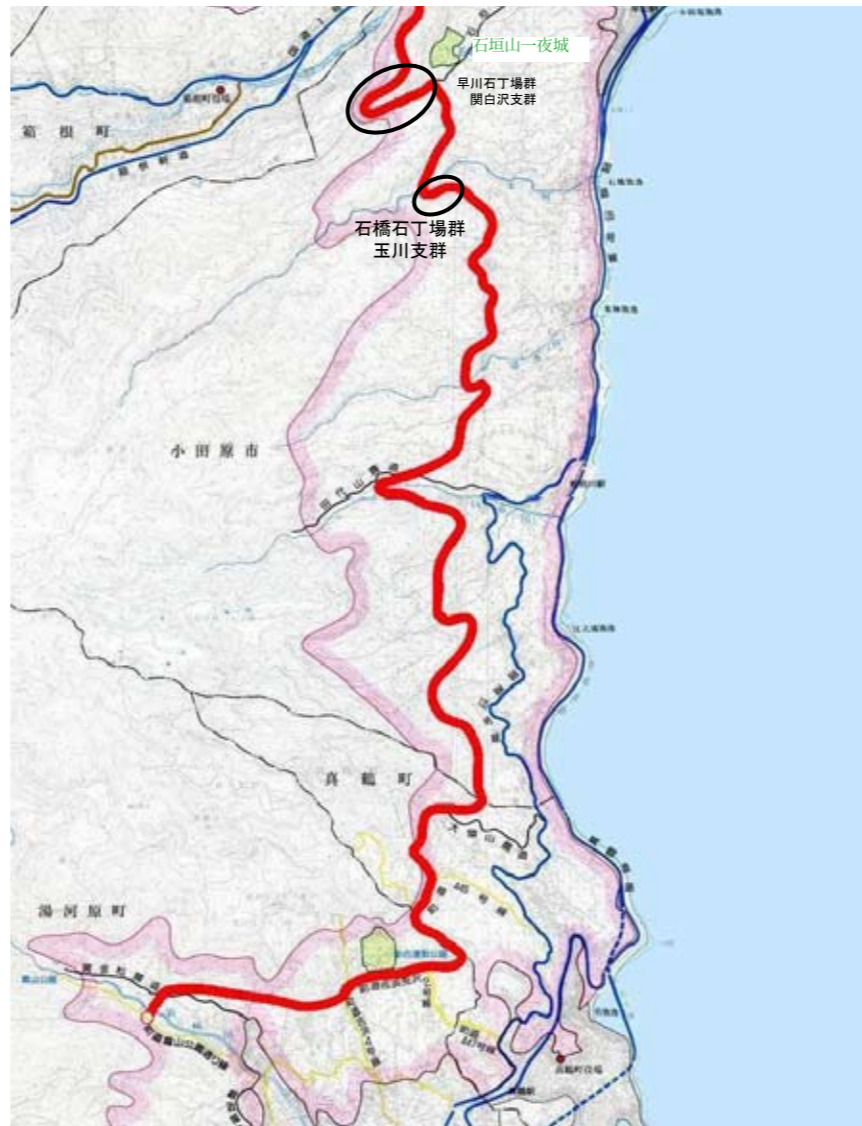
遺跡位置

保存を目的として行っています。

本整備事業に関わる発掘調査は、早川石丁場群関白沢支群として2006・2007年に2度行いました。

その時の調査によって検出された遺構の一部は、関係機関のご理解・ご協力により現地で現状保存されたほか、一部の割石も小田原市郷土文化館や石垣山一夜城などに移設されています（現状保存範囲は現在整備中のため、見学することは出来ません）。

今回調査を行っている石橋石丁場群玉川支群は、前回調査したところから南へ約800 mほど離れた地点で、尾根を越えた相模湾側に位置しています。



調査範囲

石丁場の様相

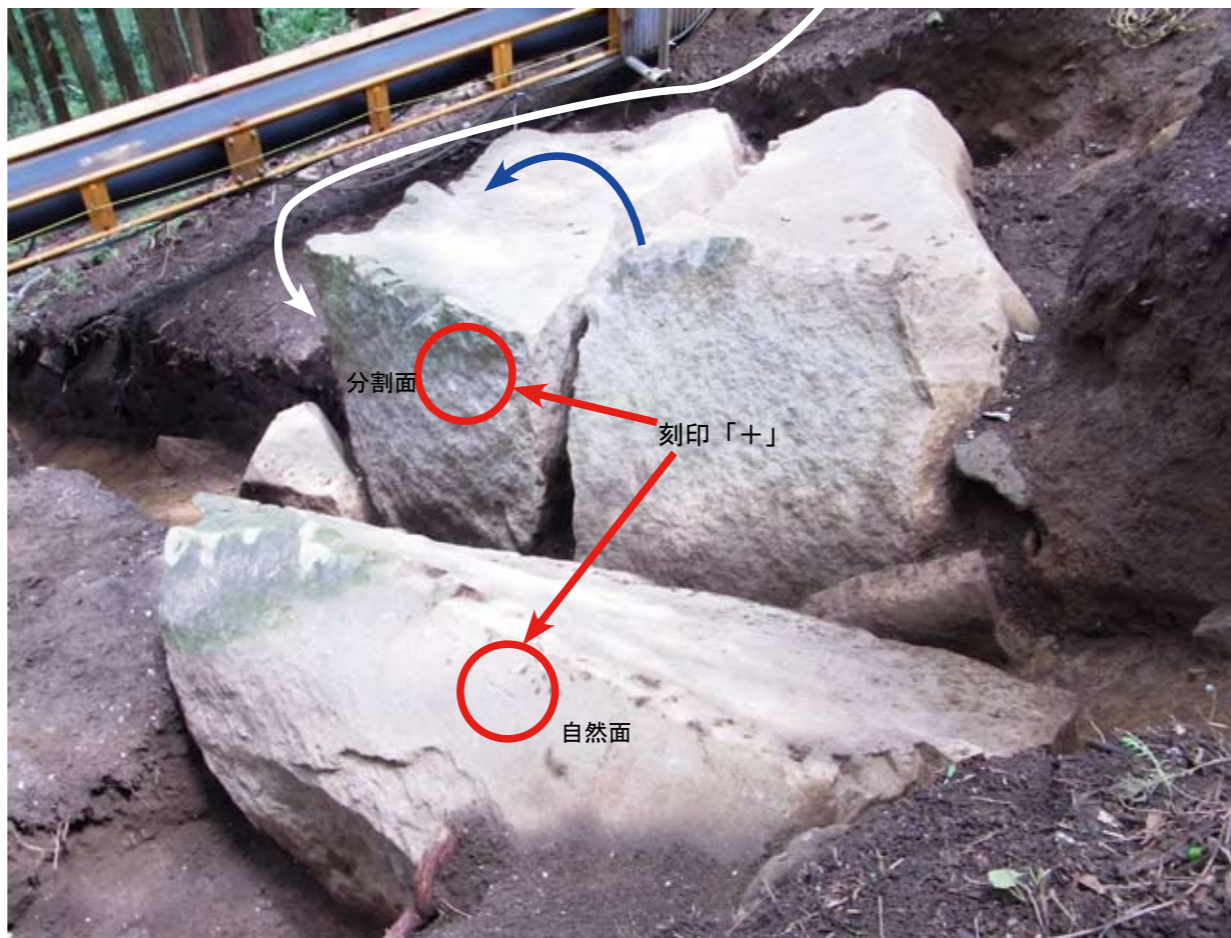
石橋石丁場群玉川支群は、江戸城築城時（慶長九（1604）年～寛永十三（1636）年）に、城郭を構築する際に必要な石垣用材として割石を切り出した作業場と推定されています。

調査の結果、山に転石として存在する巨大な礫を切り出すために礫の周辺を掘り下げている様子（採掘坑）、礫に切り出しを行う設計線をノミで刻み込んでいる様子（下取り線）、矢と呼ばれるくさび状の道具によって石を割ろうとしたものの、矢を差し込む穴（矢穴）が欠けてしまい、礫の分割が失敗した様子、礫を矢によって3分割することに成功した状態（左下写真）、できあがった割石を山の下方へ引き下ろそうとしている様子、などの作業の様子を観察することができました。さらにそれぞれの割石の周辺には、分割作業中に剥落した剥片が出土しており、それらの剥片が礫に接合する例が認められています。

また、早川石丁場群関白沢支群と同様に、自然面や割石の分割面などに刻印が発見されています。刻印にはいくつかの種類が見られるようです。



剥片の接合



分割面

刻印「+」

自然面

礫を割る

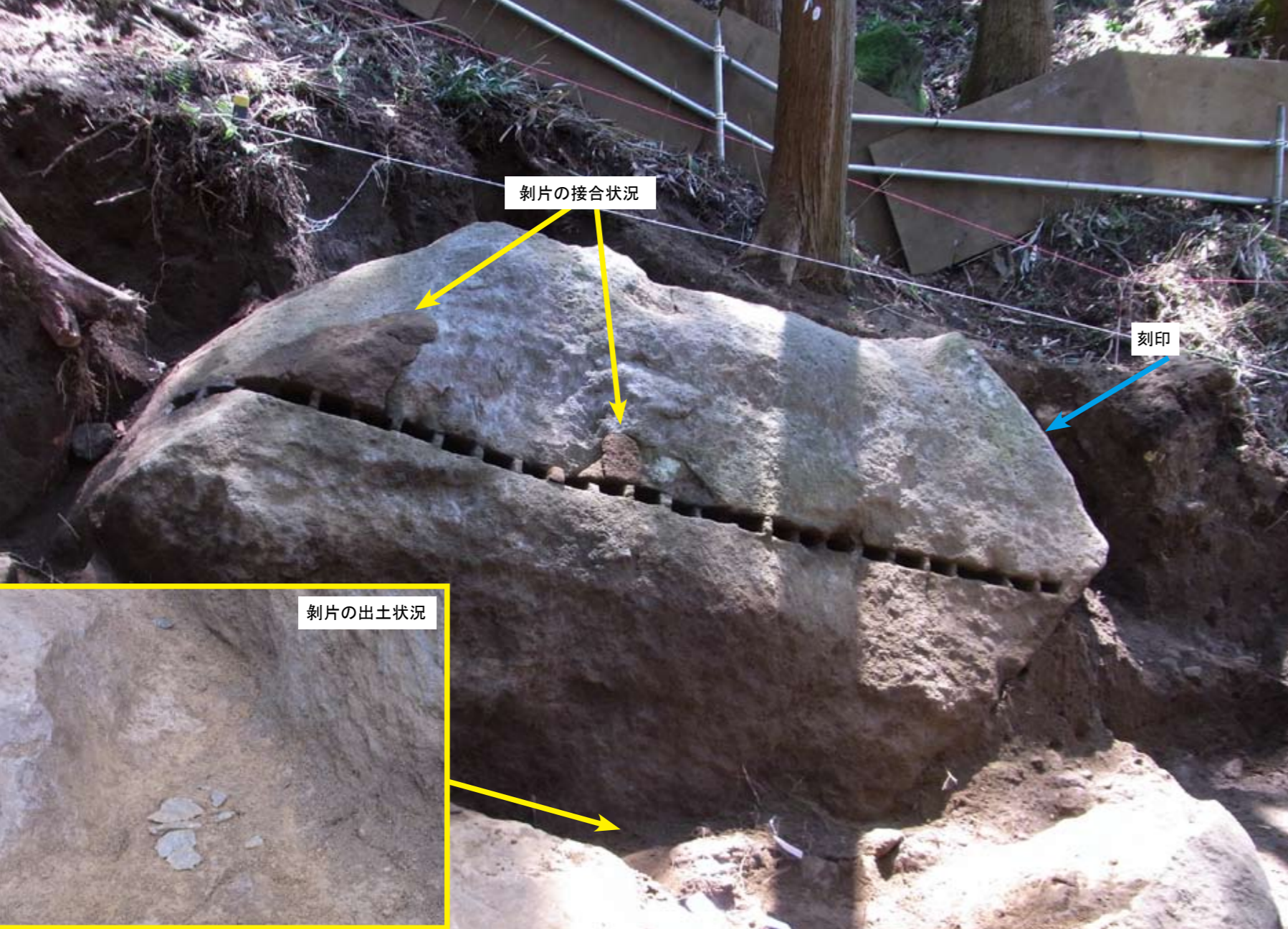
左写真の割石の周囲を観察したところ、石全体を土の中から掘り起こした痕跡が見つかりました。石全体を掘り出すことにより、石の大きさや石全体の質を見定めたものと考えられます。

いよいよ石の分割作業に入っていきます。

この割石にはすでに矢穴がうがたれており、下取り線は一部分しか観察されませんでした。石を割っていく順番が見て取れました。

まず最初に必要のない手前の石を分割します。次に石垣用材となる石を等高線に平行となる方向へ矢穴をうがち割り取っています。その際斜面下方（写真奥左手）の割石は、谷方向へ90°回転（写真青線矢印）したようで、分割面が空に向いています。その後いつの段階かは不明ですが斜面上方（写真奥右手）の石は数十cm斜面を滑落したようです。

その後、割石はこの地にそのまま残されました。



刻 印

礫の自然面や割石の分割面に刻印が観察されています。刻印の記号は早川石丁場群関白沢支群で見られたものとは異なっており、本石丁場群では「+」、「T」、「十」などが見られます。多くの数で比較しているわけではありませんが、今のところ礫の自然面、割石の分割面での相違は見られないようです。またここでは早川の例とは異なり、割石の分割面の刻印には、小口面のほかに割石の側面に刻まれている例が発見されています。



運 搬

石橋石丁場群玉川支群から切り出した石垣用材は、玉川沿いの道をつたって山から引き下ろされたと考えられます。また様々な当時の文書によると、海からは石舟と呼ばれる船によって江戸湾まで海上輸送がなされたとしています。さて無事運ばれた石橋石丁場の石材は江戸城の中、どのあたりの石垣に積まれているのでしょうか。これは今後の研究課題です。

調査範囲上位から東を望む

